

「ある同窓会での年金談義」(3)

団塊の世代に属する旧友のエコノミスト、アクチュアリー、評論家の3人が、久しぶりに同窓会で顔を会わせた。二次会の席で、政府の年金改革を酒の肴に論じ合う彼らの会話は、酒量とともにエスカレートしてきたが、もう少し耳を傾けてみよう。(連載の最終回)

公的年金の意義

(評論家) ところで、そもそも公的年金って何のためにあるのかなあ。こんなに国民の重荷になっているのに、続ける必要があるのかどうか、分からなくなってきたよ。

(アクチュアリー) 要するに、高齢者が働けなくなったら、生活費を稼ぐ方法がなくなってしまふ。それに備えて在職中に積立を行い、老後所得を確保しようということなんだよね。

(エコノミスト) しかし、何も政府が音頭をとって個人の老後の生活保障まで面倒を見る必要はないんじゃないの。僕なんか、元気なうちには、あちこち旅行したり、楽しく暮らしたいよ。また、歳をとってからは、お金があっても使えないじゃないか。

(評論家) そりゃ極端な考えだなあ。老後にだってお金はかかるよ。国民が皆そんな風を考えるのなら、国が強制的に年金を運営するのも分かるような気がするよ。

(アクチュアリー) それは、国によって考え方が異なり、「ゆりかごから墓場まで」と言われたイギリスでも、公的年金民営化論が盛んになっている。しかし、老後に生活が困難な人を、国が放っておけないのも事実だ。父権主義(パターナリズム)と言われるかもしれないけど。

(エコノミスト) 別に国がやらなくても、いいんじゃないの。市場に委ねてうまく行く保証はないけれど、逆に政府にまかせれば、何でもうまく行くという訳じゃない。可能な限り民営化の方が良いというのが世界的な流れだよ。企業年金でも個人年金でも可能なはずだからね。

(評論家) だけど、予想外のインフレとかには、民間の年金では対応できないんじゃないの。

(アクチュアリー) 予想外の低出生率と低金利、おまけに失業率アップで、公的年金の方も、制度自体が危ないよ。

(評論家) 企業年金や個人年金に入らない人はどうなるの。結局、生活保護とか国で面倒見ることになったら、その分税金が高くなるだけじゃないか。

(エコノミスト) 国であれ家族であれ、高齢者が増えれば、結局、誰かが費用を負担する必要があり、公的年金制度を改革しても、負担がなくなる訳ではない。まあ、生活力のない高齢者ばかりになっても困るから、ある程度は仕方ないが、政府の口出しは最低限にして欲しいよ。

(アクチュアリー) そこで、ナショナル・ミニマム論が登場することになるんだろ。わが国では、基礎年金がナショナル・ミニマムだと言われているけど、本当なんだろうか。

(評論家) 基礎年金が導入されたのは、割と最近の昭和60(1985)年だけど、どちらかというと、従前所得を維持するという考え方で年金制度が設計されてきたと思う。それ以前にあった厚生年金の定額部分の水準は今より高かったから、もしそれがナショナル・ミニマムというのなら、その水準はどんどん下がっていることになるぞ。

(アクチュアリー) 本当にナショナル・ミニマムなら、生活保護さえあればいいんじゃないか。まだ元気で稼げる人や、資産家に、年金を支払う必要はないんじゃないの。

(エコノミスト) でもまあ生活保護に対する抵抗感も強いから、年金でナショナル・ミニマムを保証するのなら、基礎年金の部分だけを公的年金にして、厚生年金などが果たしている部分は、個人の選択にまかせる方法もある。エコノミストの間では、これが分かりやすいとして、賛成する人が多いよ。

所得再配分機能（負担と給付）——世代間の公平性

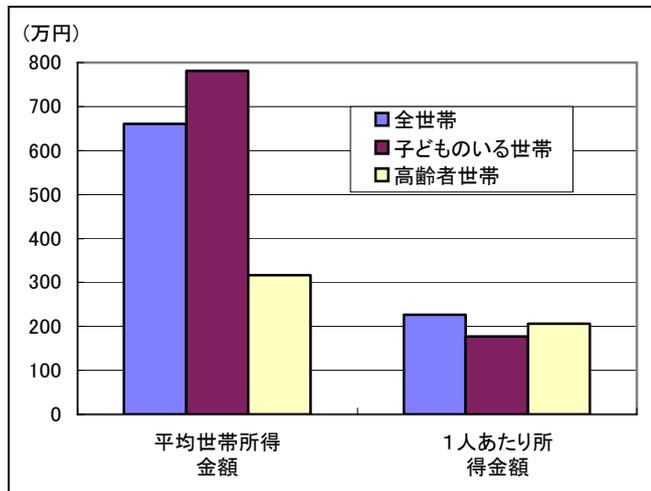
(アクチュアリー) だけど、そもそも結構豊かな高齢者に、年金を支払う必要があるの。

(エコノミスト) 今の制度は行き過ぎだよ。このあいだ知人に2人めの子供ができたんだけど、給料も安いのに、子供を養って、さらに年金の負担もしているんだ。退職して年金で生活している親の方が税金も安いし、よっぽどリッチだと言っていたよ。

図1 厚生省国民生活基礎調査（平成9年）

(評論家) 最新の調査を見ると、高齢者世帯の平均所得金額は316万円。一方、子どものいる世帯は782万円だね。ところが、世帯人員数がかかなり違うので、1人あたり所得金額にすると、高齢者世帯が207万円、子どものいる世帯が177万円と逆転する。あくまで平均だけどね。

(エコノミスト) そら見ろ。僕らや貧しい若者からお金を集めて、リッチなお年寄に配っているだけじゃないか。大体、エコノミストなんて商売は、給料は安いし、やってられないよ。評論家なんて、いい加減なことを言っているいい商売だねー。



(評論家) おいおい、ちょっと飲み過ぎじゃないか。顔が真っ赤だよ。評論家だって、テレビで活躍しているタレント的な人は別として、その日暮らしの一介の自由業、自営業者に過ぎないから、毎日、病気になったらどうしようかと不安に思っているんだ。僕のような者にとっては、公的年金の行く末は心配だよ。

(アクチュアリー) そうそう、サラリーマンと自営業者の不公平も問題だよ。大体ちゃんと税金を払ってない上に、国民年金も3割だかが未納というんだから。(じろりと評論家をにらむ)

(評論家) な、なにを言うんだ。大体僕らには、君たちみたいに年金保険料の半分を負担してくれる事業主はいないし、そもそも報酬比例部分の年金もないんだぞ。(口から泡を飛ばす)

(エコノミスト) まあまあ、話を戻そうよ。とにかく70歳以上の人が、払い込んだ保険料の18倍もの年金をもらっているのは、老人過保護もはなはだしい。

(評論家) でも、彼らは、戦争体験があるし、公的年金がない時代に自分で親を扶養したし、戦後の高度成長にも貢献してくれた。自助努力なんかする余裕はなかったんじゃないの。

[裏表紙に続く]

[3ページからの続き]

(エコノミスト)だから、もう年金を受け取り始めている人の分は下げられないというわけだ。だとすると、僕らが年金給付切り下げのターゲットじゃないの。(テーブルをたたく)

(アクチュアリー) 同じ老後でも、定年で働けない人もいれば、高所得の人もいる。こういういろんな人たちの所得を再配分するのは、もはや年金問題でなく、税制問題だ。相続税は年金の財源にしたらいいいし、高齢者は年金と雇用所得を総合課税にすれば、いいんじゃないか。

(評論家) 高齢者は投票率も高いから、政治的には絶望的な話だろう。だけど、確かに高齢者から一方で遺産を相続し、他方では年金を払って、何しているんだろうという感じもあるな。

(エコノミスト) ちょっと待ってよ。遺産を残してくれる親がいない僕なんか、二世代ローンを相続したぞ。このままじゃ、年金でローンを返すしかない。だから年金が減ると困るんだよ。

(アクチュアリー) 家があるだけいいじゃないか。僕なんて、あちこちの飲み代を、年金で返すしかなさそうだよ。年金減らさないでくれー。(呂律が回らず、泣き叫ぶ)

(評論家) とにかく僕らの年金の引き下げには断固反対というのが結論だね。…えっと、年金改革はどうするんだったかな。何だか訳がわからなくなっちゃったな。もうそろそろ帰ろうよ。あれ、まだボトル残ってるな。マスター、このボトル、キープしといてよ。

(店のマスター) かしこまりました。「**修正積立方式**」でお預かりしておきます。

(3人) ……。

(とうとう3人とも完全にできあがってしまって、マスターの言葉が正確に理解できなかったようだ。将来への不安を抱えながら、3人は帰路につく。終電に間に合うだろうか。まだまだ議論が必要な点もあるが、この辺で3人の話はお終いにしたい。ご愛読を感謝します。)

発行： ニッセイ基礎研究所

〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-1-1 日本生命日比谷ビル内

TEL： (03) 3597-8644 FAX： (03) 5512-7164

本誌記載のデータは各種の情報源から入手、加工したものです。その正確性と完全性を保証するものではありません。

本誌内容について、将来見解を変更することもあります。本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、契約の締結や解約を勧誘するものではありません。なお、ニッセイ基礎研究所に対する書面による同意なしに本誌を複写、引用、配布することを禁じます。